

「あなたの敵の牛あるいはろばが迷っているのに出会ったならば、必ず彼のもとに連れ戻さなければならぬ(出エジプト23:4)」。何だか好い話だな。謙信が信玄に「塩を贈った」みたいにホロッとさせられる。なぜ、ホロツとなるのか。敵への敬意が憎しみを凌ぐ、という人間の希望を感じずから。

「もし、あなたを憎む者のろばが荷物の下に倒れ伏しているのを見た場合、それを見捨てておいてはならない。必ず彼と共に助け起こさなければならぬ(23:5)」。敵とか憎む相手とは、ヘブライ人同胞内でのこと。このホロツとなる倫理を枠組みなしに、どうしたら世界へ拡げられるだろうか。

素朴な敵や憎悪が、束ねられて増大すると戦争をも引き起こす。今日、国民国家とか民族というような恣意的な区分が「敵」という幻想を欲する。いや、敵をつくり出すことで幻想の民族区分を政治利用する、とでも言えようか。だから、憎しみの火が小さい内に「冷や水」をぶっかけられたい。

イエスという人は、冷や水をぶっかける人であった。いやそれ以上に、イエス御自身が冷や水そのものであった。前者はイエスの言葉そのものから解るし、後者はイエスの生き方と死に方で分かる。

イエスは律法の隣人愛を示し(5:43)、こう付け加える。「しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい(5:44)」。イエスの戒めは、律法の「敵のろばを助ける」と何が違うのか。イエスが命ずる愛の律法は、もはや同胞内に限らない。

「迫害する者のために祈る」ことは、民族や部族、社会層や性別、呪いや憎悪によっても断ち切られない、私たちに与えられた愛だ。

AとBが憎み合っている。一方が義で一方が悪であっても、憎しみは別物だ。サタンは両者の間に憎悪として存在する。たがAでもBでも、どちらかが愛したらどうだろう。愛せないなら、祈ったらどうだろうか。サタンは「冷や水」をぶっかけられて、そこに留まってははいられまい。

私たちが「ごめんなさい」と小さくつぶやくだけでサタンが去って行った、という経験は誰にもあるはずだ。

イエス御自身は「冷や水」そのもの。愛を徹底して生き、十字架で憎悪の素(罪)を担って死んだ。イエスの愛に忠実であるほど、敵や迫害者が増えるかもしれない。「わたしは彼らに御言葉を伝えましたが、世は彼らを憎みました(ヨハネ17:14)」とイエスが祈ったごとく。

十字架の愛と赦しに忠実な者は、世の功利的な力と衝突して敵が増える。だが私たちは、そんな敵を愛し、迫害する者のために祈りたい(マタイ5:44)。容易ではないが求められている。

祈る者は折々、洗礼を受けた時のように、十字架という「冷や水」を受ける。世の憎悪の炎が私に燃え移っても、私はその冷や水で消火されるだろう。

続く誰もが知る言葉には、新たに目が開かれる思いだった。

「あなたがたの天の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである(5:45)」。

なんと自然は、「敵を愛し、迫害者のために祈れ(5:44)」というイエスの教えに忠実ではないか。個々の動植物は、生存を賭けた闘いに必死だが、自然全体では神の愛が具体的に現れている。

「あなたがたの天の子となるためである(5:45)」を聞きもらさないでほしい。罪を十字架で赦された者として私たちは、この自然のように敵を愛し、祈ることができる。そして、永遠の天の子となる。



《おまけのひとこと》

愛すること 祈ることが世を変えていく 世のために 人類のために なんて抽象的なことではない
身近な敵 身近な迫害者のことを祈る 神に忠実な自然の恵みに倣うなら サタンは留まりえない